

〔古今要覽稿曆占〕うけむけ

うけむけは、元五行家の説にして、たとへば木は申に受氣し、酉に胎し、戌に養し、亥に生し、子に沐浴し、丑に冠帶し、寅に臨官し、卯に王し、辰に衰へ、巳に病ひし、午に死し、未に葬る、胎より王まで七氣を、王相の氣として、これを有氣といひ、衰病以下を死没の氣として、これを無氣といふなり、五行大義これによれば、この事隋より前にはや傳ふる所ありしならん、たゞしこれは一年十二月の際の事なれば、今いふごとく、七年、五年とつゞくにはあらざるなり、然るを土木は申酉戊亥子年月を有氣とし、金は巳午未申酉を有氣とし、火は寅卯辰巳午を有氣とすと三才圖會いふは、生より沐浴冠帶臨官王の五氣のみをとれるなり、たゞしその事、一行禪師に出たりと同上いへば、唐よりはや五年七年といふことになりしならん、さてこの事、隋唐に露顯せしことなれば、皇朝にもふるく傳はりしなるべし、されども、假名曆に書載ることは、貞享よりなりといへり、貞享曆法通、書、循環曆、然れば有卦無卦とかき、あるひは有暇無暇と書べし、閑田耕筆などいふは誤なり、また、うけ振舞とて、今世俗にすることも、大かた寛永以前より有しこと、見ゆれども、そのはじめさだかならず、又うけに入人は、名物のかしらに、ふ文字のつきたる七種を、そなふるなどいふこと、そのはじめいかなる故にや、詳ならず、佛説に七福即生といふことあれば、有氣七年の數に合せし祝事にても有べきにや、

〔古今要覽稿曆〕うけむけ

うけむけは、元陰陽家の説にて、曆法にあづからざる事なり、然れども世俗専ら稱することなれば、貞享の頃より、假名曆に書載ること、はなりぬるとぞ、さてうけとは有氣と書て、己が性の年に旺するをいふ、たとへば木性の人は、酉年八月酉日酉上刻有氣に入て、七年の間は有氣なり、むけとは、無氣と書て、木性の人は、辰年三月辰日辰上刻無氣に入て、五年の間はむけとて、虚耗に屬するなり、餘は下にみえたり、貞享曆法通書、及循環曆、但し昔より如斯通用すといへども、根元は十二運の盛衰を以、五性に配せるものい